

序

奈良盆地の北端に平城京ならのみやこがつくられたのは今から1270年前のことであった。和銅3年（710）に元明天皇が移り住んだこの新しい都の特色は、幅員90mの朱雀大路を中軸とし、整然とした碁盤目状の街路を配したことにある。この制度は中国古来の都市計画にならったもので、さきの藤原京にはじまり、その東西幅を2倍に拡大したものとされる。中国では都市全域に嚴重な城壁をめぐるし外敵に備えたのに対し、平城京には全く城壁をつくらなかった。ただ、京の南中央、朱雀大路の南端に正門をつくり、これを羅城門と名づけている。元来羅城とは都市を囲む城壁のことであり、名のみ中国の制をならったのであった。現在羅城門跡は奈良市の南端、大和郡山市と境をわける佐保川の左岸堤防の下に埋っており、1969～72年の発掘調査で基壇の西端が検出され、その北に九条大路が朱雀大路と直交した様子が明らかとなった。

今回の県道城廻り線予定地の発掘調査は、奈良県教育委員会の依頼にもとづいておこなったものである。この地は羅城門跡のすぐ西に接する右京九条一坊の九条大路上に該当し、羅城門両脇に築地塀がとりつく様、あるいは門の南辺や九条大路の南辺の状況など未解決の問題に触れるため、期するところは大きであった。本書に収録したように、第1年次の調査では九条大路北半について多くの新知見を得ることができたが、南半については調査が及ばず、解明すべき多くは次年度に持ちこされた。とはいえ、九条大路をはじめとする条坊遺構が造京当初の段階で計画的につくられ、平安時代のはじめまで存続したことが判明すると共に、小型海獣葡萄鏡の出土など遺跡の性格の一端を窺う資料を得たことは、今後の平城京研究にとって貴重な成果であろう。

第2年次の調査に期待すると共に、今後とも京内において組織的計画的な調査がおこなわれ、ますます京研究が進展することを願うものである。

1981年3月

奈良国立文化財研究所長 坪井清足